

地域の健全育成の 環境づくり

- ① 児童館の活動内容等を広報するとともに、地域の様々な子どもの育成活動に協力するなど、児童館活動に関する理解や協力が得られるように努めること。
- ② 児童館を利用する子どもが地域住民と直接交流できる機会を設けるなど、地域全体で健全育成を進める環境づくりに努めること。
- ③ 子どもの健全育成を推進する地域の児童福祉施設として、地域組織活動等の協力を得ながら、その機能を発揮するように努めること。
- ④ 地域の児童遊園や公園、子どもが利用できる施設等を活用したり、児童館がない地域に出向いたりして、遊びや児童館で行う文化的活動等の体験の機会を提供するように努めること。

遊びによる
子どもの育成子どもの
居場所の提供子どもが意見を
述べる場の提供配慮を必要とする
子どもへの対応

子育て支援の実施

地域の健全育成の
環境づくりボランティア等の
育成と活動支援放課後児童クラブの
実施と連携

おでかけ児童館

■ 児童館の概要

名 称	倉敷市真備児童館
設 置 主 体	倉敷市
運 営 主 体	社会福祉法人 倉敷市総合福祉事業団
開 設 年 月	平成17（2005）年2月
開 館 時 間	火～日 9：00-17：15 休館日：月曜日、祝日、年末年始（12/28～1/3） ※祝日と日曜日が重なった場合は開館する ※夏休み期間中は日曜日を休館日とし、月曜日は開館する
所 在 地	岡山県倉敷市真備町有井1556-2 ※被災後の臨時開館場所：倉敷市真備町箭田1161-1（真備保健福祉会館3階） ※令和2（2020）年3月22日に、元の場所にて再オープン
ホームページ等	https://kgwc.or.jp/mabiji/
児 童 館 種 別	小型児童館
占 有 面 積	被災前の児童館 / 土地約1200㎡ 建物400㎡ 被災後の臨時児童館 / 室内約65㎡ + デッキ約60㎡
職 員 数	常勤4人（館長1人含む）
年 間 利 用 者 数	被災前 / 約40,000人 被災後 / 約20,000人
自 治 体 の 人 口	倉敷市 / 482,099人（令和2（2020）年2月末現在） 真備地区 / 20,635人（令和元年12月末） ※被災前の平成30（2018）年6月末の真備地区の人口は約23,000人
主 な 利 用 児 童 の 学 校 数	小学校6校 中学校2校 高校1校

※ 利用者の年齢層の内訳：未就学児6割、小学生3割、中学生1割、高校生わずか（被災後）
被災後は、多くの小中学生が真備町外へ避難したため来られなくなった。半年が過ぎたあたりから真備町へ戻ってきた子どもも多いが、被災前に通っていた学校は復旧しておらず、多くの子どもたちが遠方の学校へバスで通学している。そのため、帰宅後に児童館に来る時間がないのが現状。



活動の前提にあるもの

倉敷市内にある6児童館は、10年以上前から「出前キッズ号」と呼ばれる事業を実施してきました。「出前キッズ号」では、職員が私用車で公民館やイベントに向き、遊びのプログラムを提供していましたが、平成30（2018）年4月より、「おでかけ児童館」という新事業名で新たな出発を切り、同年11月に専用車両「おでかけ児童館号」が各児童館に1台ずつ配備されました。

活動の概要

「おでかけ児童館」の目的

- 自宅から児童館までが遠く、児童館へ行くことができない子どもたちに遊びのプログラムを提供すること。
- 児童館の存在を知らない子どもや保護者に対して児童館の広報・PRをすること。
- 活動日時は、対象となる世代に合わせて決めています。

（例）対象が未就学児の子どもと親→平日午前中

- 活動頻度は月平均4回です。
- 放課後児童クラブ、公民館などの公共施設、地域イベントの開催場所などで実施しています。
- イベントの規模が大きい場合は、6児童館合同で「おでかけ児童館」を行うこともあります。

遊びによる
子どもの育成子どもの
居場所の提供子どもが意見を
述べる場の提供配慮を必要とする
子どもへの対応

子育て支援の実施

地域の健全育成の
環境づくりボランティア等の
育成と活動支援放課後児童クラブの
実施と連携

活動のポイント

地域の健全育成の環境づくり

対象世代に合った複数の遊びのプログラムを準備する

遊びのプログラムの内容は、対象となる子どもの年齢と、実施する場所の条件を考えて決めます。また、想定外のこと（思っていたよりも人数が少ない、場所が狭いなど）が起きても対応できるよう、複数の遊びを準備します。なお、おでかけ児童館は、児童館が自主的に決めて実施することもあれば、親子クラブや放課後児童クラブなどからの依頼で実施することもあります。

訪問先の担当者と事前打ち合わせをする

訪問する場所（環境）や、そこに来る子どもの様子を知る人と、事前の打ち合わせをしておくことで、当日の運営がスムーズです。広さを確かめたり、床が畳かフローリングかを確認したりすることで、より適切な遊びのプログラムを提供することができます。また、訪問先が放課後児童クラブの場合は、普段、どんな遊びをしているかを事前に確かめることで、子どもたちにとって新鮮な遊びになります。

普段から他児童館と連携しておく

倉敷市内にある6児童館の運営主体は同一であることから、普段から連携がとれています。月に1度の館長会議で共有される「〇〇の親子クラブが来てほしいと言っていた」などの情報を元に、次回の訪問先を決めることもあります。また、原則として「おでかけ児童館」は管轄地区内で実施していますが、同じ日時に訪問要請が入ったときなどは、児童館同士でカバーし合うこともあります。こうした普段からの連携が、平成30（2018）年7月の西日本豪雨で当館が被災した後にも役立ちました。





実践する上での工夫点や注意点

✓ 子どもの参画度を高める工夫

真備児童館においては、遊びのプログラムへの子どもの参画度は決して高いほうではありませんが、「おでかけ児童館」では、出かけた先でのセッティングや片づけの手伝いなど、子どもの参画度を高める工夫をしています。

✓ 地域のイベント等にも積極的に参加する

地域のお祭りやイベントなどにも「おでかけ児童館」として参加し、工作などのワークショップを開いています。例えば、毎月第2日曜日に開催される朝市にはブースを出しています。来場する大人や子どもたちに向けて児童館の広報ができる上、主催者側の方々にも認知していただくことで、「来月のイベントには子どもが多く来るからブースを出してみたら？」といった、児童館が把握しきれていない情報を共有していただく場合もあります。

✓ 地域のニーズは行く先々で聴く

地域のニーズは、他児童館との情報交換でも共有していますが、それに加え、「おでかけ児童館」に来る保護者や子どもたちとの会話で、直接ニーズを聴くようにしています。「こんな遊びがしたい」、「こんなおもちゃがあると嬉しい」、「ママ友が『〇〇公民館にも来てほしい』と言っていた」といった声を聴いて、可能な限り対応するようにしています。



遊びによる
子どもの育成

子どもの
居場所の提供

子どもが意見を
述べる場の提供

配慮を必要とする
子どもへの対応

子育て支援の実施

地域の健全育成の
環境づくり

ボランティア等の
育成と活動支援

放課後児童クラブの
実施と連携



活動を通して見られる子どもの**変化**

「おでかけ児童館」は、同一の放課後児童クラブや親子クラブで実施すると、同じ子どもが複数回利用することもあります。一方で、単発で地域の行事などに実施する場合など、1回限りの利用になることもあります。児童館での活動とは異なり、職員と子ども、子ども同士、親同士が初対面になることのほうが多いこともあり、遊び始めはやや緊張した様子で消極的な子どもたちですが、一度遊びが始まってしまえば、遊びに夢中になり仲良くなります。「おでかけ児童館」の終了時間になると、多くの子どもたちが名残惜しそうにしながら「また来てね」「今度はいつ来てくれる?」といった言葉を口にします。



「おでかけ児童館」に参加した**感想**

※一部抜粋

とても楽しかった。
もう終わり?
もっと遊びたい!

ただで遊べる場所（児童館）
があるなんて知らなかった。
家からは遠いので、今度、親に
児童館に連れて行ってもらう!

児童館までは遠く、なかなか
連れて行けないので、家の
近くまで来てくれて助かります。

————— など



活動がもたらす多様な効果

「おでかけ児童館」では、行く先々で多様な人たちと出会います。それが、児童館の広報になり、地域のニーズを聴くツールになり、児童館への理解や協力にもつながっていると思います。

平成30（2018）年7月の西日本豪雨で被災した際は、実施してきたノウハウや連携の仕組みが、被災直後の児童館運営に役立ちました。

～「遊びの支援」を利用した人の声～

「親は片付けがあるので、子どもを預かっていただけで本当に助かりました」

「避難所では子どもたちに『静かにして!』と言ってばかりだったので、日中、子どもたちが元気に楽しく遊べる遊び場ができてよかったです」

「どうしたらいいかわからない中で、先生たちにやさしく声をかけていただきありがたかったです」

「避難所生活は、知らない人ばかりだったこともあり、親も気を使いましたが、子どもたちにもがまんをさせてばかりでした。被災直後から、毎日来てくださり、子どもたちを遊ばせてくれて本当に助かりました。暑い時期だったので、水遊びは特にありがたかったです。遊び場がなかったら、親子ともにストレスでつぶれていたと思います」



活動を通して得た「気づき」

被災した住民は避難所での生活が始まり、大人は被災した家屋の片付け等で多忙になります。小学校で避難生活をする世帯の未就学児は、隣接する幼稚園が居場所となりました。「倉敷市内の児童館は子どものケアを」という運営主体の方針に基づき、真備児童館と被災しなかった5児童館は約2週間にわたり児童館での業務を休止し、全職員が真備町にある避難所に隣接する幼稚園を訪れ、遊びの支援を行いました。そんな中で、被災前の児童館を利用していた子どもや、「おでかけ児童館」で出会った子どもたちと思いがけず再会することも度々ありました。

少し落ち着いてきたタイミングで、真備児童館以外の5児童館は縮小開館を始め、一部の職員と真備児童館の職員が8月末まで真備町で遊びの支援を続けました。9月からは、真備児童館も、他の児童館の事務所に間借りをしましたが、通常の業務をすることは不可能だったため、職員は他館に分散し、行った先で業務のお手伝いをしました。そんな中で、真備保健福祉会館の3階を借りられることになり、10月1日より、臨時開館させることができました。

普段から児童館同士が横のつながりを持っていたこと、また、「おでかけ児童館」を通して、遊びのプログラムを行うノウハウを持っていたことが、有事の際に力を発揮したと思います。

遊びによる
子どもの育成

子どもの
居場所の提供

子どもが意見を
述べる場の提供

配慮を必要とする
子どもへの対応

子育て支援の実施

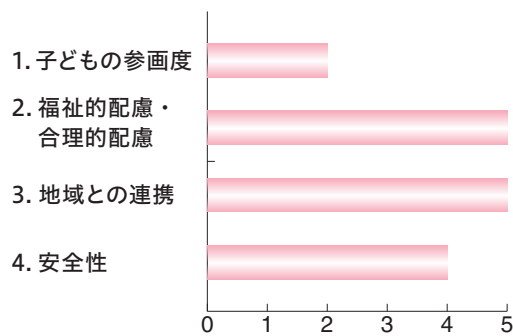
地域の健全育成の
環境づくり

ボランティア等の
育成と活動支援

放課後児童クラブの
実施と連携



職員による自己評価



1. 子どもの参画度…2

子どもに対して「何をしたいか」を問いかけ、その意見や要望を企画に反映していますが、真備児童館のプログラムは、職員が企画し、準備するものが多いため、子どもの「参画」の度合いは低いと考えます。

2. 福祉的配慮・合理的配慮…5

3. 地域との連携…5

4. 安全性…4

被災前の場所でも、現在の臨時の場所でも、安全面、衛生面で最大限の配慮をしています。ただ、被災前の児童館で子どもがケガをし、病院に連れていったことがあるため4としました。



● 防災・避難マニュアルの見直し

平成30（2018）年7月の西日本豪雨はすべてが想定外であり、防災マニュアルでの水害時の避難場所も水没しました。被災後、真備児童館があった場所は「浸水想定5m以上」と指定され、現在、それを踏まえた防災・避難マニュアルを作成中です。

● 被災した子どもや保護者と接する上で気を付けたこと

被災した人は、子どもも保護者も大きなストレスを抱えているため、原則として、こちらから根ほり葉ほり尋ねるようなことは控えました。基本的には、自ら話してくれるのを「待つ」姿勢で、話に共感しながら「聴く」ことを大切にしました。